

II-103 川遊び・水遊びの原体験に基づく河川整備の考え方について

建設省土木研究所 正会員 小栗 幸雄

建設省土木研究所 正会員 清水 裕

1 はじめに

近年、潤いと憩いのある生活環境を創造するため、地域住民から愛され、親しまれ、潤いがあり、子供たちの遊べる川づくりを求める声が高まってきており、この要望に答えるため、様々な試みが各地の河川で行われている。環境的に優れた河川としては、景観的に良い河川、生物の豊富な河川、川の中に入って遊べる河川などが上げられるが、大人の求める河川と子供の求める河川は必ずしも一致するものではないと考えられる。そこで、子供の頃の体験を振り返ることにより、子供が求める川づくりを把握し、子供を対象とした河川の整備手法を明らかにしようとするものである。そのため、これらを明らかにするため、原体験アンケート調査票を作成し、河川整備を行なう上で、どのような河川を、どの年齢を対象に整備していけばよいのか等を検討し、今後の河川整備の考え方の一つを示した。

2. 調査方法

調査は原体験調査票を配布し、特によく遊んだ川を思い出してもらい、川遊びの経験の有無、遊んだ川の規模、川までの距離、遊んだ年齢、遊んだ頻度、遊んだ内容等13項目について記入してもらう方法で行なった。アンケート数は177(男159、女18)で、年齢は20・30・40代がそれぞれ約30%の構成となっている。

3. 調査結果

「小さい頃近くの川や水路などで遊んだことがありますか」の問いに対しては、177人中173人(98%)が経験ありと答えており、経験者の内99%の人が川や水路で遊んだと答えている。

「何歳頃よく遊びましたか」の問いに対しては、小学校低学年、高学年合わせて85%となっており、ほとんどの人が小学生のときに川遊びを行っていた(図-2)。遊んだ回数は、夏休みを見てみると8割の人が週1~2回以上となっており、川がひじょうに良い遊び場となっているとともに、自然と触れあう場所となっていたことがわかる。また、遊んだ河川の規模、河川までの距離は、

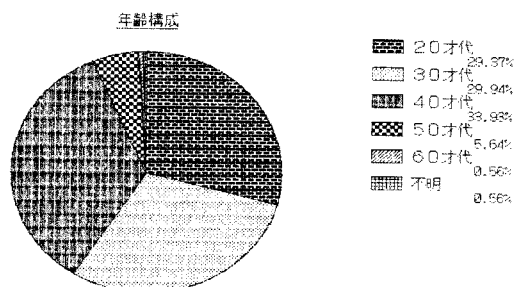


図-1 アンケート者の年齢構成

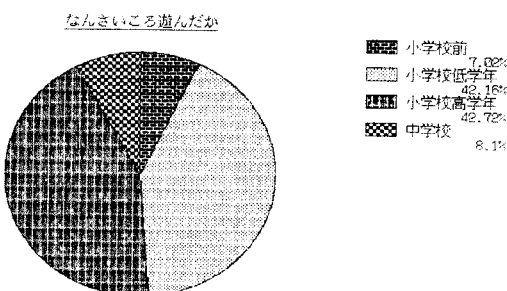


図-2 何歳頃遊んだか

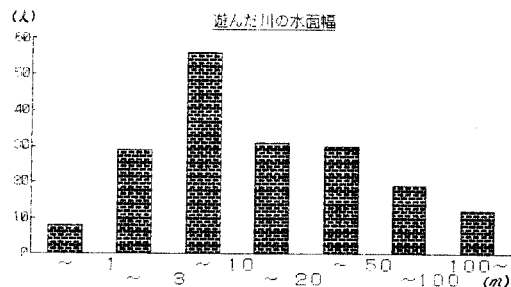


図-3 遊んだ川の水面幅

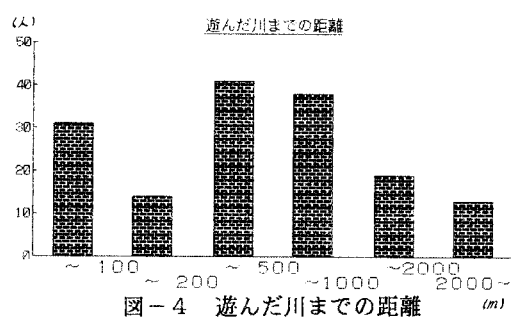


図-4 遊んだ川までの距離

図-3.4のような結果となっている。河川までの交通手段は、当然のことながら徒歩(67%)、自転車(31%)である。

次に「何をして遊んだか」について、夏休みと、それ以外にわけて年代別に整理した(図-5,6)。夏休みは、魚とり、水泳、魚釣り、水遊びの順で、年齢別の特徴として20代のザリガニとりが水泳、水遊びといった直接水に入る活動より多くなっている。夏以外は、魚釣り、魚とり、石投げ、ザリガニとりの順で、魚とりが30、40代で一番高くなっている。図では回答数の多かったものから10位までを示しているが、このほかにも数多くの遊びを行っていた。

生物との係わりが大きいことから、年代別に魚とりなどについての整理したものが図-7,8である。

4. 考察

川遊びをよくしていたのは8割以上を小学生が占めていることから、河川整備においては、この年齢層を対象として整備をしていくことが重要であることが分かった。

河川規模は、水面幅10m以下の小河川が50%、100m以上の大河川は6%と少ないことから、大河川より中小河川で主に遊んでいたことがわかった。河川までの距離は、500m以下が55%、1000m以下が79%であり、身近な河川で遊んでいたかが分かった。小学生ころの時代の移動手段としては、徒歩または自転車であることから、少なくとも1000m以内に河川で遊べる場所を整備することが重要であることが考えられる。

夏は水に直接入って遊ぶ活動と、生物を捕って遊ぶ活動(魚、昆虫など)が多いことから、生物の存在が主要な要素であり、生物の種類としては魚(フナ、メダカ、ドジョウ)や、ザリガニ、カエル、トンボなどが一般的な生物が対象である。子供が遊ぶ川づくりのためには、生物を保全する際には生物の種類より生物の存在量に配慮する必要があると推測される。

川遊びの経験のない4人は、近くの川は水が汚れ、水量も少なかったと答えている。また年代も一人を除いて20代となっており、水質の悪化、水量の減少とともに遊びの変化があるのではないかと推測される。

5. おわりに

河川環境整備を行なうにあたっては、今までの調査と今回の調査により、大河川と、中小河川をわけて整備方針を考えることが提案できる。今回の調査より中小河川の整備は、①小学生を対象に、②移動距離を考慮し、③身近な河川を整備していくことが大切であることを示すことができた。

小学生の頃から河川に接することにより、川を良く理解し大切にすることも自然と学ぶことができると思われる。また、子供が遊ぶことにより母親の関心を川へ向けることも可能と思われる。しかし、現在の小学生をとりまく環境として、遊びの変化(テレビゲームなど)、川遊びへの指導(川では遊ばぬ)、遊ぶ時間の減少(塾など)についても考えていく必要があろう。

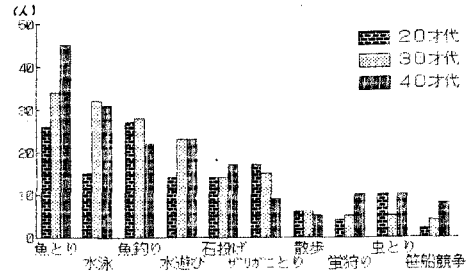


図-5 年代別活動種目(夏)

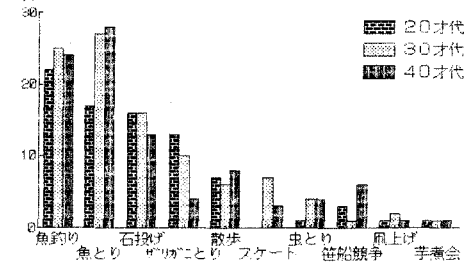


図-6 年代別活動種目(夏以外)

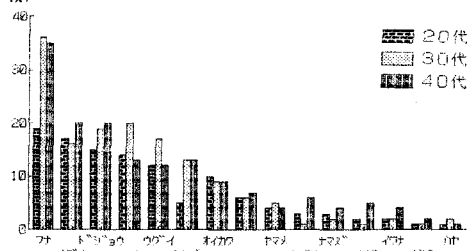


図-7 年代別魚とりの魚種

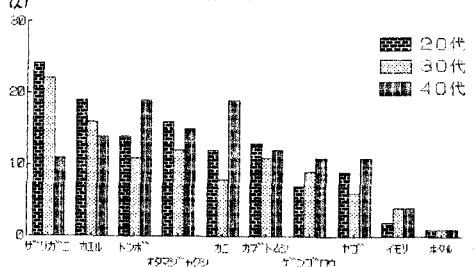


図-8 年代別採取生物(魚以外)